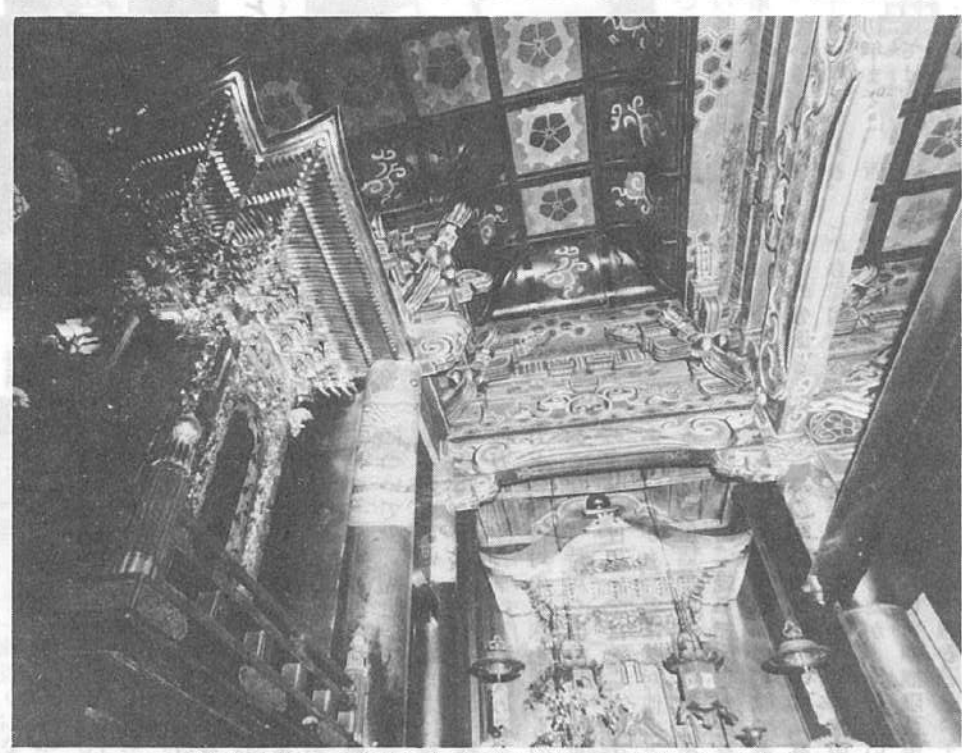


寺報 善 巧

発行
〒938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山497
白雪山 善 巧 寺
☎宇奈月(07656)(5)-0055

一月十三日より十六日まで
御正忌報恩講
布教 白山若院

- 寺 一月
- 一日 元旦会 年頭参り
 - 二日 日曜学校のカルタ会
 - 三日 栗虫御助成
 - 四日 雪ん子 婦人会
 - 五日 栗虫・報恩講
 - 六日
 - 七日
- 御正忌報恩講
- 一三日 連夜 午後一時
 - 一四日 連夜 午後一時
 - 一五日 子供の集い 午前十時
 - お講(下村) 午前十一時半
 - 連夜 午後一時
 - 初夜 午後七時(下立愛本・栃屋・熊野・下村・浦山・内山のおつとめ練習会の方々は是非おまいりしましょう)
 - 一六日 晨朝 午前七時
 - 法話 午前九時・十時半
 - お講(栃屋・熊野・浦山) 十一時半
 - 満座 午後一時
 - 二〇日 浦山・報恩講
 - 二八日



五十年ぶりの荘厳大修復を待つ善巧寺の内陣

新年お目出度うございます。旧年中は、色々と御心配りを頂き有難うございました。本年も倍旧の御好意を御願い申し上げます。

いよいよ明年は、明教院二百回忌法要の年です。年の始めに先ずこのことを、御門徒の方々と共に心に期したいと存じます。

あと一年。漸くここ迄来たところと云うべきか、あつと云う間にあと一年となつていたと云うべきか。兎も角、新しい年を迎えて身辺を見廻し、さて、法要に備えて、心の準備はどうだろうかと思ひ、三省して見ようではありませんか。

昭和十年、明教院百五十回忌に際して、前住職である亡父は、次の四句を詠んでいます。

小春日や墓銘鮮やかに
仰がれて
ぬかづけは墓畔のゆうべ
帰雁鳴く

在りし日の面影かたれ
老銀杏樹
秋の夕陽しめやかに
古杉なつかしき

あと一年

お墓も、銀杏樹も、そして杉の大木も、私達が毎日、眺めているものです。来年は、此のお墓の前で、銀杏樹の下で、門徒大衆と共に

—新年を迎えて—

に学匠明教院、人間雪山僧侶の面影を偲んで、大法要の行事が繰り広げられると思うと、感慨に堪えぬものがあります。

百五十回忌法要のことを記憶している人も、段々と少なくなつて来ました。まして、二百年の昔、全国から集まつて来た信心の行者を、空華の学問で教化した明教院の真実の姿は、年月の向うに、淡くなつて居ります。

来年こそは、色んな意味で、この真実な姿の再現、復元を、皆様と一緒に、実現させねばと思ひます。

法要準備は、着々と、仕上げに向つて進められています。しかし、念には念を入れよと云う事もあります。法要の主旨に沿うように、綿密に計画されねばなりません。

更には、門徒の総意が何よりの宝であります。

今年一年、何回も、御面倒を御願ひすることもありますが、御知恵を借りなければならぬことも多いと思ひます。

大法要の大きな意義を汲みとつて御協力を惜しまれることの無いよう、年の始めに当り、呉々も御願ひ申す次第であります。

(住職 雪山俊之)

明教院僧鎔は何を説いたか

空華と



明教院
僧鎔 伝

空華学轍の思想



勸学寮頭
桐溪順忍師

一、空華学轍とは

空華学轍といわれるものは、明教院僧鎔師（一七三〇—一七八三）が、号を空華といい、学塾を空華廬といったので、その学轍を空華学轍といったのである。その弟子には柔遠（一七四二—一七九八）道隱（一七四一—一八一三）の二師があり、柔遠師は常に越中に住していたが、道隱師は多く近畿に住しており、その弟子の性海（越中の生まれ）に至って学説が展開したので、その弟子、善讓などの学派を堺空華とも称し、越中を中心にしている。

この学轍には、柔遠・道隱の後には、行照、性海、善讓、鮮妙などの諸学匠が配出し、道隱の弟子月珠は師説とはやや趣を異にする学説を説いて、豊前学派といっているが、この学轍からの分派といふべきである。しかも、明治の初年までは、西本願寺の宗学においては、主流的な役割をしてきたものである。

二、絶対他力の思想

この学轍の特色ともいふべきものの一は、おそらく柔遠師によってはいまわったもののようであるが越中で学寮を開き、子弟を教育しても、各々の学匠は、自分の弟子としないで、僧鎔の墓に参らせて空華の学弟子といったようである。だから、学者が学塾を開いても、その学寮の学生であるという印に木札に「丸に花」という焼はんのことにする。

その主張の根底となる絶対他力について少し説明しておこう。もし、他力という言葉は自力に對する意味で用いるものならば、絶対他力という言葉は無理である。自力という待対の意味をもつものであるなら、待対をはなれた絶対という言葉は用いてはならないのである。しかも、私は絶対他力という言葉を用いているのだが、その意味は西田（幾多郎）先生がもちいられる「絶対無」の意味であつて、この場合の「無」とは「有に對する無」ではなく「有の無限否定」である。したがって、今いう絶対他力とは、「自力の無限否定」を意味するものである。

あるものを用いていた。それは私の子供の時、祖父の印順の仏母寮の学生が、托鉢に出るとき、仏母の学生であることの証明として用いた木札が本堂の裏に幾枚かあったのを記憶しているのである。これは、越中においては、学塾を開き、学生を養育しても、それは空華師の弟子であり、自分の弟子とは考えていなかったようである。

だから、絶対他力という思想は衆生が浄土に往生するには、全部が全部、阿弥陀如来の名号・願力によるものであつて、凡夫の自力的なものは無限に否定する思想であり、反面からいえば、私からは成仏する可能性を無限に否定する「絶対悪」の思想ともなるのである。

一 つづー

この論文は勸学寮頭（西本願寺の学者の最高責任者）の桐溪順忍和上（富山）が、さる五十二年九月、富山「本願寺で行われた、龍谷教学会議富山大会で記念講演をなさり、翌五十四年六月にこれをまとめて龍谷教学」に掲載されたものであります。

「空華学轍とは」からはじまつて論文は一万六千字におよぶものですが、中を貫く心は、明教院僧鎔師にはじまつた空華の学問の根本的な思想です。

いよいよ来年秋にその明教院僧鎔師の二百回忌を迎えるにあたり空華の末弟といわれる桐溪和上に特にお許しを得て、全文をこの寺報「善巧」に転載させていただきますことになりました。

明教院師は何を説かれたのか一少々、むずかしいことばも出てまいります。私達の寺が後世に語り継ぐべき明教院僧鎔師の遺徳のかけがえのない記念講話として、熟読願えれば、幸甚であります。

寺
ごよみ

二月

- 一日 お講 浦山
- 三日 三市・報恩講
- 四日
- 六日 生地・報恩講
- 七日
- 九日 下立・報恩講
- 一〇日
- 一六日 お講 下立
- 一八日 音沢御助成会
- 院と門徒の有志、鬼原勝次、尾沢初雄、藤沢正雄、中山慶太郎の四氏で、六六聖地ラジギール・ナカランダーブダガヤークシナガラールンビニーサヘトマヘトを巡拝してきます。帰国は三月一日の予定

笑いは勝利の歌

笑う門には福来たる。一人生における笑いについて考えるとき、私たちの頭にひよいと浮かぶのは、このなつかしいことばである。ハナシ家も最初のことばである。よくこれを口にする。先日はハナシ家ではなく、当選ホヤホヤの中沖知事さんからこれを聞いた。テレビのインタビュでのごときだが、なんでも中沖さんは、自分の子供たちに「落語を聞け」とおっしゃっている。なかなかユニーク。で、アナウンサーが「どうしてですか？」なんて返すと「いや、まあ、笑っていいばい。幸せが来たら笑えるのであ

はうなすける。

る。中沖さんだって、当選したから笑えるわけで、落選してたら笑えなかったはずである。それ、現に笑えない人がいるのなら、あそこで「笑う門には

効き目高い保健薬

ある。適当に笑うことは健康上よろしい。笑うと血管がやわらかくなり、血圧も下がる。それに胸筋や心臓の筋肉をやわらけて、内分泌をよくして若返りの薬にもなる。そのうえ、消化、吸収、排泄ともよくなるから、お医者さんなども、笑いほどいいビタミン剤よりも効きめのたしかな保健薬だとすすめている

「笑いとは、相手に対する瞬間的な、怒(こっ)然として発せられた優越感の表現である」

笑いは人の薬

だが、明暗両性宿す魔物

雪山 隆弘

れは幸せは、むこうの方からやってくるのだろうか。私はそう

「笑いは勝利の歌だ」といって、笑いは人の薬、なんてことわざあるでしょう」ぐらいいしとけはよかった。これならよくわ

「笑いとは、相手に対する瞬間的な、怒(こっ)然として発せられた優越感の表現である」

「他人に比べて、自分の煩惱が少ないと思うのは、きつと、お前のうぬぼれの心が強すぎるからであらう。煩惱具足の凡夫のー」

に

忍辱 にんじよくとは

ことでありまして、つまり、ハラを立てなかったら、スマートになるんです。いいじゃないですか、これこそが、美容の原点。表面をいくら化粧品でぬったくり、どれほど美しい服で飾っても、この心の美容体操に勝るものはないとい

かですって？ オヤオヤ、もうハラを立てていらっしゃる。やだねースマートじゃないよ。その顔は。

どわす証(おう)、他を傷つける害、自分の罪をかくす覆(ふく)自らの心を憤怒せしめる忿(ふん)、他人をねたむ嫉、聞く耳持たずに一人苦しむ惱(なう)など、人間の煩惱は果てしなくわき起こり、ご存知のところでは百八つ。いやまだそれでも足りず八万四千とか。で、それをみんな一つにまとめて、皮袋につめ込んで毎日ぶら下げて歩いているのが、だれあろう、わたしであり、あなたなんです。

「他人に比べて、自分の煩惱が少ないと思うのは、きつと、お前のうぬぼれの心が強すぎるからであらう。煩惱具足の凡夫のー」

ほ

煩惱 悪い心のはたらきを煩惱といいます。その根本は、先のハラが立つという(瞋)、欲しいなあと思う(貪)、しまったなあというおろかしさ(癡)の三つ。これが渦巻いて、おごりの橋(きょう)、他人を軽視する慢、物惜しみの慳(けん)、恥知らずの無慚(さん)、無愧(ぎ)、憂うつな惰沈(こんじん)、なまけ心の懈怠(けだい)、わがまま勝手な放逸、うらみの恨、へつらいの諂(てん)、他人をま

八万三九九九、いやケチでもないから八万三九九八……)ね。だれかと比べて、必ず引き算をやり出すんです。われわれは。ところが仏様はズバリ、私達を見抜いて、煩惱具足の凡夫とおっしゃる。具足というのは、一つとして欠かさず持っているということであり、まずからして、つじつまが合わないようになってくる。で、もう一度仏様に聞いてみますと、仏様はこうおっしゃっているようであります。

「他人に比べて、自分の煩惱が少ないと思うのは、きつと、お前のうぬぼれの心が強すぎるからであらう。煩惱具足の凡夫のー」

一口説法

えるんじゃないですか。

さあ、善は急げだ、さつそく実行してみて下さい。なに？ そんなことわかってるって？ わかってるけど出来るわけじゃないじゃない

まず、それこそが最高の財産で、だれからもホメられ、終日心安らかで、悩み事は一切なくなり、さらにうれしいことには、常に端正であるといわれます。この端正とは、英語に訳せばスマートという

「他人に比べて、自分の煩惱が少ないと思うのは、きつと、お前のうぬぼれの心が強すぎるからであらう。煩惱具足の凡夫のー」

「他人に比べて、自分の煩惱が少ないと思うのは、きつと、お前のうぬぼれの心が強すぎるからであらう。煩惱具足の凡夫のー」

「他人に比べて、自分の煩惱が少ないと思うのは、きつと、お前のうぬぼれの心が強すぎるからであらう。煩惱具足の凡夫のー」

「他人に比べて、自分の煩惱が少ないと思うのは、きつと、お前のうぬぼれの心が強すぎるからであらう。煩惱具足の凡夫のー」

善巧寺門徒年忌一覽

(一周忌) 本波孝(母、2・26)
島田博嗣(姉、3・23) 橋本良造
(3・29) 河村幸作(母、4・10)
西田敦子(祖母、4・27) 久田新
作(5・15) 川内彦義(母、6・6)
中坂石次郎(母、6・29) 開沢庄
作(妻、8・5) 高島文夫(9・
3) 島田次平(母、9・4) 西中
勝(10・21) 橋場孝正(母、10・
27) 長沢幸一(11・11) 開沢甚作
(11・18) 佐々木二作(妻、11・
22)

(三回忌) 島田勲(母、1・18)
福沢順七(母、1・23) 佐々木岩
松(1・27) 浦山弘(母、2・8)
開沢信義(2・13) 佐々木貞義(3・
4) 橋場東作(母、3・7) 開沢
権作(3・11) 中村石次郎(3・
23) 佐々木安正(母、5・2) 野
畑市右門(5・19) 大浦力次郎
(6・3) 川内幸七(母、6・7)
谷口輝夫(妻、6・8) 根塚三郎
(6・9) 川瀬松(6・12) 佐々
木新九郎(妻、6・13) 櫻義孝(妻、
6・22) 河村義和(母、6・28)
福沢勇悦(7・10) 浦田甚作(妻、
7・21) 佐々木宗太郎(7・27)
根岸清二郎(8・2) 野島政次(8・
9) 大森武男(妻、8・25) 岡田
猪作(母、8・29) 上坂伊作(10
・7) 開沢茂(母、11・19) 沢田理
作(11・19) 森岡栄一(母、11・
25) 谷口義松(母、12・17) 野畑
幸次郎(妻、12・30)

(七回忌) 清水清次(母、1・
24) 沢田最一(父、1・28) 中村
幸作(2・4) 有馬幸二郎(弘父、
2・23) 沢田伊太郎(2・24) 橋弘父、
2・25) 野島重一(母、3・31)
森岡清松(母、4・1) 新保祐七
(妻、4・5) 大森孝之助(母、
4・23) 中林久吉(妻、5・26)
高島省吾(5・29) 開沢彦左門
(6・4) 沢田忠信(母、6・14)
宮前義治(6・15) 島田元吉(6・

28) 佐々木秋夫(7・11) 西中与四
(8・6) 山本彦由(母、8・28) 島
田清一(母、8・31) 根岸ちい(9・
25) 丸田秀由(9・30) 川瀬儀友
(10・27) 佐々木次盛(11・1) 中
林勝治(妻、11・19) 野村伊太
郎(11・30) 大浦猪次郎(12・18)
丸田清作(母、12・24)

(十三回忌) 西中森一(母、1
・12) 中村長作(3・9) 開沢義
正(4・11) 清水久作(4・17)
福沢茂(母、4・21) 中坂与次郎
(6・5) 佐々木三作(妻、7・
4) 橋場直一(7・31) 橋爪栄作
(妻、8・14) 川瀬与助(8・25)
福沢与吉(9・8) 川内栄作(9・14)
(坂川啓作(9・15) 大浦和左門
(9・20) 佐々木三作(10・3) 森
岡春信(祖母、10・4) 川内義
夫(母、11・9) 福沢才吉(二男、
11・15) 佐々木みよ(11・30) 佐
々木栄吉(母、12・1) 寺崎由次
郎(12・2) 野島己之助(12・11)
上坂好二(母、12・24)

(十七回忌) 大森伊左次郎(1
・6) 高松重治(1・16) 福沢勇
悦(母、1・26) 開沢栄作(2・
2) 高島彦助(孫、2・7) 板倉
由次郎(祖母、3・3) 熊野拾昇
(母、3・11) 開沢安次郎(3・
21) 山根要造(母、4・17) 橋場
一二三(父、5・5) 丸田梅吉(5・
5) 佐々木宗太郎(妻、5・19)
板倉太一(母、5・20) 鬼原長之
助(母、5・24) 橋常由(母、5・
31) 川内盛義(母、6・5) 本波秀
三(三男、6・17) 沢田修明(母、
6・22) 川口由次郎(6・27) 谷
口源太郎(6・28) 川内石太郎(7・
9) 板倉貞吉(7・11) 鬼原六右
エ門(祖母、7・26) 丸田豊次(7・
26) 中坂由松(父、7・31) 中林
要作(妻、8・20) 橋場宇之(妻、
9・1) 中坂一郎(長男、9・14)
谷口仁作(9・14) 開沢栄作(妻、

9・28) 佐々木入次(母、10・10)
高島彦丸(母、10・21) 坂川久次
郎(母、10・22) 野崎与五郎(11・
6) 佐々木与左エ門(11・26) 藤
沢豊(母、12・9) 佐藤直行(長
男、12・12) 大森理二(父、12・
12)

(二十三回忌) 川内辰次(1・
5) 佐々木幸次郎(妻、1・25)
山本仁太郎(妻、1・28) 岩上太
平(2・5) 高島三太郎(妻、2・
18) 鬼原長吉(長女、3・4)
沢木伊左(妻、3・5) 大野茂八
郎(二男、3・5) 坂川繁二郎(妻、
4・17) 野崎吉兵衛(妻、4・24)
岩崎作郎(母、5・18) 佐々木与
八(5・29) 大森森吉(長女、6・
18) 中村与四松(妹、6・23) 根
塚仁八(妻、7・16) 尾沢文次郎
(7・28) 川口利助(7・29) 佐
々木石松(孫、8・8) 島田久徳
(長女、8・19) 高島関夫(母、
8・30) 五谷孫助(9・24) 沢木
菊次(9・30) 新保栄一(父、10・
7) 浦沢文次郎(10・27) 佐々木
次正(祖母、11・20) 浦沢栄吉(母、
11・30) 八木武吉(母、12・2)
藤沢吉五郎(母、12・14)

(二十七回忌) 川内盛義(父、
1・1) 野村耕機(八男、1・11)
板川得男(1・16) 野村次郎五郎
(1・18) 根塚孝(1・31) 福沢
菊次郎(2・1) 沢木与吉(2・
9) 沢木菊次(妻、2・14) 岡田
長作(妻、2・15) 大浦寅次郎(孫、
2・21) 佐々木九郎七(2・28)
丸龜松右エ門(3・30) 川口清松
(4・12) 板倉宗作(4・30) 福沢
与吉(妻、5・13) 佐々木七造(七
男、5・13) 川内石松(5・16)
佐々木有義(妻、5・16) 野村伊
太郎(次男、5・16) 島田二郎(5・
25) 佐々木光治(母、5・30) 佐
々木保(三女、6・1) 福沢五郎
助(6・6) 大森六右エ門(妻、6・
7) 鬼原金造(6・9) 大森伊左
次郎(孫、6・11) 大浦祐吉(6・
25) 大野宗右エ門(母、6・27)
福沢栄次郎(妻、7・8) 浦沢次

郎(長男、7・10) 橋場仁作(三男、
7・18) 丸田久助(7・18) 浦山
作次郎(7・25) 沢田秀三(妻、7・
27) 高島市太郎(7・30) 谷川和
十郎(9・9) 長沢義男(三男、9・
18) 坂川広作(妻、9・24) 丸田
由次郎(9・25) 丸田菊次郎(妻、
9・26) 川内博(母、10・21) 開
沢権作(妻、11・2) 西中勇一(父、
11・7) 朝倉竹次郎(11・17) 朝
倉繁松(11・17) 川内栄次郎(11・
18) 浦沢次郎(妻、11・20) 清水
信市(12・1) 岩上吉十郎(妻、
12・5) 新保竹次郎(12・17) 佐
々木次郎作(12・21) 中坂一郎(父、
12・25)

(三十三回忌) 島田友秀(長男、
1・10) 河村定造(1・15) 大森
義悦(三女、1・27) 沢田峯吉(長
男、1・29) 佐々木弥三太郎(妻、
1・30) 根塚清作(1・31) 川内
与作(三女、2・20) 佐々木甚兵
エ(孫、2・28) 島田宇左エ門(孫、
3・4) 岡田直正(妻、3・9)
島田清右エ門(3・25) 川瀬松(母、
3・26) 板倉長次郎(3・29) 瀬
川長兵衛(母、4・17) 本波元右
エ門(妻、4・17) 沢田嘉之(長
女、4・29) 大森宇之助(妻、4・
23) 島田恒次郎(妻、4・24)
山下順(母、5・1) 浦山駒次郎
(5・22) 們清太郎(5・24) 橋
本良造(三男、5・30) 川瀬幸吉
(妻、6・3) 佐々木三太郎(6・
7) 福沢平助(母、6・12) 中
村庄作(二女、6・24) 丸田永次
郎(7・18) 島田方貞(孫、7・
21) 飛田岩次郎(8・11) 佐々木
与作(母、8・13) 佐々木次郎七(長
男、9・14) 佐々木有義(9・22)
佐々木繁作(長男、9・24) 二口
安次郎(10・12) 佐々木虎松(母、
10・17) 鬼原勇作(三男、10・17)
岩上浅次(妻、11・3) 谷口五左
エ門(長男、11・8) 橋用次郎(11・
20) 島田安次(妻、11・22) 丸田
久次郎(次男、11・30) 島田浅次
郎(三女、12・6) 佐々木次盛(母、
12・6) 佐々木市太郎(母、12・7)
福沢元次郎(妻、12・30)

(五十回忌) 福沢辰次郎(二女、
2・6) 谷口太次平(孫、2・16)
開沢庄作(長男、3・11) 岡田良
作(五女、3・20) 坂川徳次郎(3
・25) 櫻兵助(母、3・31) 山本
兵三郎(母、4・2) 川口利助(長
男、4・12) 佐々木甚平(4・15)
開沢宗左エ門(孫、4・25) 浦滝
友一(弟、5・5) 野崎菊次郎(五男、
5・6) 本波守一(二男、5・7)
沢木三太郎(5・12) 中村新四郎
(母、5・21) 佐々木市太郎(次
男、5・31) 摺田清作(母、6・
11) 佐々木七造(孫、6・18) 川
口利助(七女、6・30) 橋場清造(母、
7・7) 丸田次郎助(母、7・21)
福沢幸次郎(三女、7・30) 尾沢
文次郎(四男、8・2) 谷口源次
郎(孫、8・6) 佐藤宗兵衛(父、
8・16) 板川直三(妻、8・19)
大森文助(8・22) 板川市郎平(8・
25) 大森助十郎(8・30) 鍋谷七
兵衛(妻、9・11) 菊地助次郎(長
男、9・18) 島田清次郎(母、9・
30) 佐々木三太郎(二男、9・10)
清水清作(10・13) 菊地賢次郎(30)
23) 藤沢龜次郎(11・10) 板川源
之助(妻、11・13) 長沢由次郎(12
・6) 中林市三郎(12・20)

(百回忌) 福沢三太郎(2・23)
根岸文五郎(3・28) 櫻助左エ門
(妻、4・4) 福沢二四郎(4・
7) 川内文次郎(長男、5・8)
浦山三太郎(母、6・25) 朝倉九郎
左エ門(6・30) 浦崎吉郎右エ門
(7・3) 川口九郎助(長男、8・21)
浦滝太平(長男、8・22) 野崎吉
郎右エ門(母、9・8) 野崎吉左
エ門(9・11) 浦田弥右エ門(10・
6) 谷口太次兵衛(30) 熊野
太郎左エ門(妻、10・30) 福沢三
郎(11・5) 山根清右エ門(11・
15) 沢木庄八(11・23) 川内小左
エ門(妻、12・28) 佐々木源作(妻、
12・9)

4

さあ 莊嚴の年

三法要推進委結成

三法要理事会はさる十月十九日の報恩講の日、臨時総会を開いて法要準備の最後の仕上げともい



いて話し合い「推進委員会」を結成して、意欲的に計画をすすめることを申し合わせました。
この日の会合では各地区の総代さん二十二名が出席、はじめに、五十七年の法要は、春と秋の二回にわけて行うことを確認したあと、推進委員会を結成、橋場啓次さん（富山）を座長に選出して、具体的な計画の検討を行いました。

初会合で「寄進続々

えるが、残る金箔、前卓、五具足などは、当初の計画通り、特別寄進を待つ以外はなく、また、それがこうした法要をつとめる場合のスジである」との寺からの説明。

これをうけて、ではその寄進を

のは内陣の莊嚴の予算的裏付の問題で三法要の予算でまかなうことができないのかということでした。これに関しては、内陣のご本尊のお身ぬぐいや宮殿の修復、巻障子の洗たくなどについては予算と、これまでの内陣法名懸志でまかな

どのように募るのかということで出席者一同活発な意見がかわされ中には「寺費の五倍・六年間」という当初の計画を、もう一年のばしたらどうかとの声も出ましたが結局、寺の意向を汲んで「われわれの寺は、われわれの手で」と、総代さんらが率先して、内陣莊嚴を進めようという力強い意見にまとまりました。

具体的には、二十本の柱のうち、最高額の二本を寄進させてもらいます。その声が浦山新の代表から出て、それでは……と栃沢の代表二名からも二本の声がかかり、全員でこの前向きな姿勢をくささずあとにつづこうという大勢がまとまりました。

会議が終わって、翌日から各地区代表者からの協力の声があいつぎ、十二月のなかばまでに浦山、東狐、魚津、下立愛本などから二十本の金柱のうち十三本までの申し入れがあり、この分では、今年三月から、いよいよ五十年ぶりの金箔張り替え工事をはじめることが出来る見通しとなりました。
推進委員会では、こうした意欲的な行動を自らすすめるとともに、今後は金箔だけでなく、前卓、五具足など多くの法物のご寄進に、門徒の方々一人一人が、積極的に協力して下さるよう、呼びかけてゆくことにしています。

まず、会議の焦点となった

十二月一日 月曜、曇。昨夜小用に目覚めてから、寝つかれず、夜ついで銀杏の葉の屋根に落ちる音を聞く。うっかり寝過ぎす。既に、窓の外に、人の話し声がする。屋上の落葉を掃いている世話方二人の声だ。今日は、下立愛本のお講の日である。何時の間にか十二月だ。此処数日、暖かい日が続き、師走に入った気がしない。朝食を済ませて、境内に立つ。銀杏落葉が庭一面に散り敷かれ曇り空ながら明るく映えて、小さな浄土を形づくっている。白い紐の線が張られているのは、ゲートボールのライン代りだ。昨日の日曜は近所の小学生が、此のゲームに

熱中していた。村の長老Nさんの好意で、遊具一式をお借りして此の間から、時々、初めている。此の新しいゲームは、アメリカから来たものか、イギリスから来たものか。子供の球遊びごっこに位に考えて、実際にやってみると、仲々面白く、結構、汗をかいている。老人会あたりでは、恰好なレクリエーションとして推奨しているらしい。

住職日誌



昨日、砂原茂一「リハビリテーション」と云う新書を読んだばかりなので、身障者の機能回復に、ゲートボールなど如何だろうと考えたりする。
台所は、例によって、大釜で煮

十一時半からお講のお勤め。お説教。何時もより、参詣の衆が多いような気がする。久しぶりの説教のように思っるのは、前回、都合があつて出来なかつたからか。

- 寺ごよみ 三月
- 一日 お講・浦山
 - 四日 栃屋・熊野・報恩講
 - 五日 入善・泊・報恩講
 - 六日 舟見・報恩講
 - 一日 太子会 恒例の聖徳太子のご法事です。善巧寺門徒の建設関係者と総代さんは是非お参り下さい。会費千円。
 - 一六日 お講・栃沢
 - 二〇日 三法要理事会 いよいよあと一年。とにかく理事の方、必ず出席して下さいますようお願いいたします。
 - 三〇日 日曜学校終了式

お寺の境内にゲートボールが
目見え、こどもやお年寄りに人
気を拍しています。



お寺とゲートボール：ちよつと場違いのようですが、ゲートは門お寺は山門などというぐらいですから、けっこう関係あるわけですが、これはまあこじつけですが、とりあえず、夢を語る会の中山慶太郎さんを中心に、お年寄りも子供も共に楽しめるスポーツをと、境内いっぱいにはコートをとって、道具もそろえ、十一月にスタートしました。

コツンコツンとボールを打ってゲートをくぐらせてゆくこのゲーム、単純なようでなかなかむずかしく、奥深く、不思議なことに、ホントの自分に出逢えたりしてとにかく楽しいスポーツです。

ご寄進

★五条袈裟四領 浦山の橋沢勇
さん。御年忌をつとめられる折に
「お寺への記念品は何にしたらい
いでしょ」とたずねられ、若院

いでおそろいのりっぱな五条袈裟と中啓、二連珠を。ありがとう。

★八角灯ろう 黒部の大敵明雄さん。実のなるギンナンのある集会所の中庭に、見事な八角型立灯ろうを下さいました。灯ろうは仏教伝来とともに渡来したもので、もとは仏殿の装飾用だったとか。寺の庭に似合うはずです。寺参りの門徒さんにも好評であります。



も、「四人の坊
さんボロボロ
の袈裟をかけ
てゐるでねえ」
といったら、
快よく住職、
若、法輪寺、
照行寺に色違



お 婦 壮 雪 日 お
経 ん 曜
の 人 年 子
会 会 会 団 校 講

第一・第三土曜日
每月第一月曜日
每月第二土曜日
每週月曜四時
每月第四日曜日
每月一日・十六日



ことばの教室「雪ん子劇団」が暮れの21日、富山市公会堂で行われた北日本新聞社主催の「クリスマス子供大会」に特別出演。2,000人の観客を前に、朝と昼の2回公演で大熱演、喝さいを浴びました。

お講のときにはお寺参りのお年寄りがみんなでブレイ。日曜学校のときはこどもたちがグループで楽しむなど人気は上々。とくに秋のイチヨウの落葉の上でのゲームは

じつに素晴らしく、日が暮れるまで境内に明るい歓声がこだましていました。春には門徒の皆さんと、親子三代ゲートボール大会をやる」と計画中であります。



合掌

いよいよ今年は、「莊嚴の年」
来年の法要をひかえて、寺の内陣
は五十年ぶりの金箔張り替えや、
御道具の修復、新調などにとりか
かります。莊嚴の年は門信徒の方
々にとっては「寄進の年」という
ことになり、何かとご無理を願わ
ねばなりません。

しかし、ありがたいことには多くの方々が進んで声をかけて下さり、三法要推進委員会の橋場座長も「本当に善巧寺の門徒の方はすばらしいです。良い心をそのまま行動にあらわされる。正直いって、第一回の会合で、あのようになみなさんが前向きだとは思ってもいませんでした」とおどろいておられました。

十二月末で二十本の金柱のうち十三本までが総代さんらの協力でメドが立ち、その他の「寄進について、あちこちから相談いただいたております。うれしいかぎりです。あなたも是非々々、ご協力を――